

報告6「福建省武夷山市城村漢城遺跡における2022年度の発掘成果」、報告7「広西チワン族自治区秦漢時代枡形基壇式城跡の発掘成果と初歩的理解」へのコメント(国際シンポジウム
中国都城考古学の最前線3
――秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展――)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 海老根, 量介 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000322

報告6「福建省武夷山市城村漢城遺跡における2022年度の発掘成果」、 報告7「広西チワン族自治区秦漢時代枅形基壇式城跡の発掘成果と初歩的理解」 へのコメント

海老根 量介（学習院大学・准教授）

両報告は、福建・広西における主に漢代の城址に関する最新の発掘成果について紹介したものである。日本では閩越や南越の考古学に関する報告を拝聴する機会はそこまで多くなく、評者は啓発を受けるところが大いにあった。このたび貴重な発表をしてくださったお二方に感謝申し上げたい。

まず報告6「福建省武夷山市城村漢城遺跡における2022年度の発掘成果」について、これまでの発掘の経緯も含めてまとめておく。

城村漢城遺跡は武夷山市興田鎮城村の西南に位置し、1958年の発見以来、長年調査発掘が進められている。1959年にかけて初歩的な発掘調査が行われ、城跡の年代が漢代であることが判明したが¹⁾、本格的に発掘が開始されたのは1980年以降のことである。以後、1996年までの間に城内の高胡南坪の宮殿遺跡、下寺崗建築遺跡、東城壁・東城門および隣接する北崗建築遺跡、城外の門前園建築遺跡などについて発掘調査が行われた²⁾。さらに1997年以降には北城門、城外の北側に位置する牛山大墓、南西に位置する新亭園墓地について発掘調査が進められている³⁾。このように、これまでの調査では城跡内外の建築遺跡や東城壁とそこに穿たれた北・東城門、および城外に散在する墓地が対象となっていた。それに対して、今回報告された2022年の調査においては、西城壁のすぐ外側に位置する杉樹下遺跡が対象となっている。特に重点的に調査されたのは西城門や西城壁外側の濠、西水門であり、水陸交通・水系の問題、また当時の環境の考察など、これまでとは性質の異なる調査に取り組んでいるのが特徴である。

城村漢城の年代や性質についても触れておこう。発掘報告では、当該城跡の年代の上限は漢王朝が閩越を封建した前202年以降、下限は閩越が武帝に滅ぼされた前110年としている⁴⁾。報告6では、発掘地点の地層の堆積や出土遺物から、遺跡を前漢閩越国時代・唐宋時代・明清時代の三期に区分しており、基本的に発掘報告の認識と一致している。城跡の性質については、城壁の内部には宮殿建築や関連する建築物が分布していることから、城跡自体は王侯貴族の生活する内城に当たり、城外の東・北・西北をとりまく崇陽溪および西南・南の山々を天然の外郭にしていると考え、この外郭区には遺址が点在していることから官署や吏民の居住地があったとし、外郭区のさらに外側には郊・野が広がるという王城の規格を持った城跡であると見ている⁵⁾。報告6でもこの立場を踏襲している⁶⁾。

城村漢城遺跡の立地を見てみると、おおむね丘陵地を取り囲むように城壁が築かれている。ただし、城全体が丘陵の上に位置しているわけではなく、城内には水桶壠・王殿壠と呼ばれる二つの山あいの谷地（日本語の関東方言で言うところの谷戸）が入り込んでいる。この谷地は、発掘報告に収録された地図や航空写真によれば、発掘が進められる前は水田として利用されており、地形から考えても湧水を含む水資源が豊富であることが予想される。二つの谷地のうち北側の水桶壠は最奥部が城内で完結しているが、南側の王殿壠は規模が大きく、城村漢城遺跡を貫いてさらに西に延びており、東西の城壁と突き当たる場所には西水門と東水門が設置されている。高胡南坪の宮殿遺址や下寺崗遺跡など、城内の主要な建築物はこの南北の谷地に挟まれた丘陵の上に築かれており、水資源が入手しやすく水害の影響の少ない場所を選んだのだろうと考えられるが、そうは言っても城内を貫く谷地の排水が重要な懸案となっていたであろうことは想像に難くない。

2022年の発掘においては、西城門の外に平行して走る二本の濠（内濠・外濠）と西水門の発掘が重点的に行われている。その結果判明したのは、西城門外の外濠は人為的に開削されたもので、南は王殿壠水道、北は苦竹窠水道につながっていること、西水門の外では東西に走る溝が発見され、これは王殿壠水道の一部と考えられることである。さらに、この二つの溝は基本的に同一平面上に位置しているといい、このことより報告6では、西城門外の外濠は、洪水期に水量が増えすぎた際に、王殿壠水道より苦竹窠水道

を經由して崇陽溪の上流に排水するという機能を持っていたと指摘している。

樓建龍氏によれば、苦竹窠水道とは王殿壠の北西に位置する、崇陽溪から南東に延びる谷を流れる水路を指す。Google Earthや百度地図の衛星写真を見ると、苦竹窠水道の流れる崇陽溪から南東に延びる谷戸と王殿壠が近接しているのが確認できることから、この二つの谷地を水路（＝西城門外の外濠）で連結させて、冠水時には王殿壠の水を崇陽溪へと流すようにしたということであろう。報告6でも言及されているように、これまでの調査においては、城村漢城遺跡の西北から崇陽溪の水を引き入れて水源とし、王殿壠水道により城内を潤し、東水門より排水して再び崇陽溪に流していたと考えられてきた⁷⁾。しかし、もともと水田に利用されているような湧水を水源とする山あいの谷地では、すでに水はそれなりに得られるのであるから、さらに大河から水を引き込む必要があったのかどうかは疑問が残る。福建は降水量が多い地域で、夏～秋には台風も多数襲来することを踏まえると、今回の報告で指摘された通り、西北方向に延びる濠を開削して、冠水時に増えすぎた水を排出するシステムを構築していたと捉えるほうが理に適っているように思われる。

なお2022年の調査では、王殿壠水道や苦竹窠水道のボーリングを行って当時の水文情報を収集するとともに、西水門や西城門の漢代の地層に対して浮選法を用いて植物の種子を見つけたり、堆積中の木炭を分析したりして、漢城周辺の環境についても考察を深めている。こうした情報を積み重ねることで、城村漢城が使用されていた当時の環境や地理により肉薄していくことに期待したい。

続いて報告7「广西チワン族自治区秦漢時代枅形基壇式城跡の発掘成果と初歩的理解」は、广西壮族自治区でこれまでに見つかっている秦漢時代の城跡を網羅的に挙げるとともに、その中でも山を削って造成された枅形の基壇を持つ城跡について詳しく紹介している。广西の城跡は当地が秦に征服されたこととともない秦代から出現し始める。秦の滅亡後は南越の支配下に置かれ、武帝の南越征服後は漢の郡県に編成された。

「广西秦漢城跡統計表」によれば、この地域の城跡は、①山に拠って築かれた城、②平地に築かれた城、③山を削って築かれた城（枅形の基壇を持つ城）、の三種類に大まかに分類できる。これらの城のうち、平地に築かれた城については、ほとんどが周囲に城壁と濠を設けて防衛体制を固めている。ところが山を削って築かれた城については、一部は濠があるものが含まれるものの、城壁は築かれていないものが多いのが特徴である。このことを根拠に、報告7ではこのタイプの城が敵からの防衛を想定したものではなく、行政管理の必要上から置かれたものだと推測している。

ただ、これには疑問がないわけではない。秦は百越の地を征服することに成功したものの、激しい抵抗に遭ってかなりの苦戦を強いられ、大きな犠牲を払った⁸⁾。また『史記』東越列伝では越人全般の習俗として「越人は剽悍で叛服常なく、いつも互いに攻撃している」と評されている⁹⁾。これらの記述を考慮すると、秦の百越征服直後、また南越時代、さらに漢王朝による南越征服後において、城壁を築かずとも防衛に関して問題がないような平和な状況だったとは考えにくい。するとこうしたタイプの城もある程度は防衛を考えて築かれていると見たほうが良いのではないだろうか。

そこで報告7で紹介された枅形の基壇を持つ城についてもう少し詳しく見てみると、武宣勒馬漢城は二重の濠が取り囲んでいるほか、南寧三江坡漢城は東側が川に面し、北・西・南の三面は自然の谷を濠としている。平樂河口漢城も南側は川に面し、北には自然の谷がある。このように、城壁がなくとも濠を築くか、自然の地形を活かして濠の代わりにしていることが分かる。そもそもこれらの城跡は多く大河沿いの高台を利用して築かれており、もとより攻めににくく守りやすい立地にある。そう考えると、城壁が存在しないことは地形に制約されるもので、防衛上さほど問題とはならなかったのかもしれない。このことは、今回紹介された中で唯一、平地に築かれた城と山を削って築かれた城の複合形とされる高寨城跡のみが城壁を持っていることから裏付けられるように思われる。

もっとも、わずか2例ではあるが、山に拠って築かれた城も城壁を設けていることから、山あいの城だからといって城壁が不要だと短絡的に考えることはできず、城壁のない「行政に特化した城」とする報告7の見解が成立する可能性も当然ながら存在する。その場合、なぜ山を削って築かれた城がそのような機

能を持つ城の立地として選択されるのか、さらなる検討が待たれる。

これらの枡形の基壇を持つ城は全て南越時代から漢代を通じて使用され続け（前漢時代で廃棄されたものも含む）、あるいは秦代にまで遡れるかもしれない。その立地に関しては、先述のようにいずれも大河沿いの高台に築かれているという特徴があり、その中でも特に川の合流点に位置しているものが多いことが目を引く。そもそも枡形の基壇を持つ城に限らず、広西の秦漢城跡はそのほとんどが河川の沿岸に築かれている。

こうした立地について、報告7では土地が広く人口の少ない嶺南地方において水上交通ルートを押さえることを意図した秦漢王朝の経営戦略だと指摘しているが、これは大変興味深い。実はこのような特徴は嶺南地方だけでなく、隣接する南方の諸地域についても当てはまる。例えば馬王堆帛書『地形図』は、前漢前期の長沙国南部の地図であり、東経111～112度30分、北緯23～26度の間、湖南省・広東省と広西壮族自治区の一部にわたり、広西の全州・灌陽県以東、湖南の新田県・広東の連州市以西、北は新田・全州以南、南は広東の珠江河口の南海までが地図の範囲に含まれるという。地図上では河川が黒い線で記され、山地も図示されているほか、県級の居住地が四角で、郷里級の居住地が丸で名称を囲まれて示されている¹⁰⁾。この地図からは、入り組んだ山地の間を縫うように河川が流れ、多くの県級・郷里級の居住地がその河川沿いに置かれていること、河川の分岐点にも居住地が多く設置されていることが読み取れる。この地図に示されている居住地はあくまで長沙国の範囲内であるが、隣接する南越の領域である広東や広西の地形についてもこれと似たような状況であったことが推測できる。また、報告6で示された「閩北秦漢遺跡分布図」を見ても、福建北部の主要な秦漢時代の遺跡が河川沿いに分布していることが確認できる。この図で示されているのは城跡だけではなく他のさまざまな遺跡を含むが、それでも人々の活動が河川沿いを中心として行われていたことはうかがえるだろう。このように、長沙国や南越・閩越の境域内のように、山地が多く河川がその間を縫って流れるような環境下では、必然的に河川を利用した水運が主要な交通ルートとなり、県城も交通の要衝である河川の合流地点付近に置かれることが多かったというのは首肯できる。

最後に、今回の報告内容とはあまり関係がないが、評者の関心に引きつけて歴史学・古文字学の方面から一点だけ問題提起をしておきたい。それは、先にも取り上げた南越・閩越・長沙国という三つの地域の交流と独自性についてである。

南越と閩越は、ともに百越の地に建てられた国という共通性を持つ。しかしその建国の事情はかなり異なっている。両地域とも秦の始皇帝による征服をうけ、郡県制を敷かれたことは同じだが、秦末の戦乱期に南越では秦の県令であった趙佗が独立して国を建てる一方、閩越では越人の君長が後に長沙王となる呉芮や劉邦に協力して反秦戦争・楚漢戦争を戦い、漢王朝成立後に諸侯として封建された。つまり、南越の支配層は秦の官吏にルーツを持ち、閩越は越人集団による国家という性質が強い。

また南越・閩越・漢王朝の関係はあまり良いとは言いがたい。南越は呂后が漢王朝の政権を握っていた頃には長沙国の辺境を攻撃し、帝を名乗り、閩越をはじめとする百越諸族の集団に財物を贈って服属させるなど、漢王朝に明確に対抗する姿勢を見せた。その後漢王朝とは関係を修復し、服従するようになるが、それは表向きのことであって、実際には南越王は国内で帝を名乗り続けていた。閩越も常に漢王朝に対して恭順の姿勢を示していたわけではなく、同じ越人国家で浙江南部に立てられていた東甌を包囲したり、南越を攻撃して漢王朝の討伐を受けたりした。その後武帝の時に南越が滅ぼされると、閩越（この頃は東越と呼ばれる）も反旗を翻し、王は「武帝」璽を製作するなど漢との対立を鮮明にしたが結局滅ぼされた。このように、南越・閩越ともに表面上は漢王朝に服従する姿勢を示しながら、隙あらば離反しようとし、また互いに勢力争いを繰り返していたのである。

こうした状況を反映するような文字史料が実際に見つかっている。広州市の南越王趙昧の墓から「文帝行璽」金印、「帝印」玉印・封泥が発掘されたことはつとに有名だが、同墓からは「秦子」金印・玉印、「秦夫人印」銅印、「秦官」封泥が出土し¹¹⁾、南越国宮署遺址出土木簡にも「秦子」・「秦官」の語句が確認できる¹²⁾。これらはそれぞれ「太子」・「太夫人」・「太官」を表したものである。この「秦」は、統一後の秦

で創出され、尊貴な官職や概念を表記する際に用いられたが、漢代には再び排除されて使われなくなったことが明らかになっている。ところが漢から事実上独立していた南越では継続して「泰」を用い続けていた¹³⁾。その一方で、海南島や広西合浦出土の「執封」印などを手掛かりに、南越では百越世界において「反漢」イデオロギーの象徴とされていた楚制を採用することで漢王朝との対抗を図ったとの指摘もなされている¹⁴⁾。すると、南越では秦の官吏としての出自を持ち百越世界に君臨する王としての独自性を出すため、秦の用字を継承しながら楚制を用いていたのではないか。

秦に由来を持たない閩越では、「泰」のような秦の用字を受け継ぐ事例は今のところ確認できない。それでも閩越と南越の共通性を伝える遺物は多数発見されている。例えば南越に特徴的な軒丸瓦として、南越国宮署遺跡を中心に大量に出土している「萬歳」軒丸瓦が挙げられるが、一部の「萬歳」軒丸瓦については類似の意匠のものが城村漢城遺跡でも発見されている¹⁵⁾。他に注目すべき軒丸瓦として「常楽」・「常楽萬歳」軒丸瓦がある。これらの軒丸瓦は城村漢城では多数出土しており、2022年の調査でも「常楽」・「萬歳」軒丸瓦が発掘されている。実はこの「常楽」・「常楽萬歳」軒丸瓦については、『漢書』王莽伝の「長楽宮を常楽室に、長安を常安に改めた」とする記述をもとに、王莽期のものであると唱えられ¹⁶⁾、城村漢城の年代をも左右する論点となっていたが、発掘報告ではさまざまな観点からこれに対して反論を加えている¹⁷⁾。その中で根拠の一つとして挙げられている前漢銅鏡の銘文「常楽未央」についてここでは注目したい。

「常楽未央」という銘文は蟠螭紋鏡という形式に分類される銅鏡に記されることが多い。蟠螭紋鏡は前漢前期に編年され、その出土地は淮河流域や長沙、広州など南方に偏っている¹⁸⁾。銅鏡と軒丸瓦で媒体の違いはあるが、両者に記される吉祥語にはある程度の共通性があり、参考にすることは可能であろう。すると城村漢城出土の「常楽」・「常楽萬歳」軒丸瓦も、中国南方を中心に流行していた吉祥語を取り入れたと捉えられるかもしれない。すでに述べた通り、閩越は南越としばしば衝突する一方、楚漢戦争では後に長沙王に封建される呉芮に協力して戦ったという経緯があり、長沙国は南越とも対立関係にあったことから、閩越と長沙国の間には何らかの往来があったとしてもおかしくない¹⁹⁾。また、呉楚七国の乱の際には呉王は閩越と連携を取ろうとしており、南方の諸国は互いに影響を与えあっていたのだろう。しかしながら、「常楽」・「常楽萬歳」軒丸瓦は南越などでは発見されていない。すると、ある程度共通性を持つ百越世界の文化を基盤としつつも、閩越の独自性を発揮するべく採用されたもの、それが「常楽」・「常楽萬歳」軒丸瓦だったのかもしれない。

以上述べたことは素人の思いつきの域を出るものではなく、検証も不十分だが、閩越・南越・長沙国といったある程度の文化的・環境的共通性を持つ地域において、何が共通のものとして受け入れられ、何がそれぞれの独自性を示すものとして選択されたのか、という点については、今後も着目しながら考察を深めていく必要があるだろう。

注

- 1) 福建省文物管理委员会「福建崇安城村漢城遺址試掘」(『考古』1960年第10期) 9頁。
- 2) この間の調査の成果は福建博物院・福建閩越王城博物館編『武夷山城村漢城遺址発掘報告(1980-1996)』(福建人民出版社、2004年)にまとめられている。
- 3) この間の調査の成果は『武夷山城村漢城遺址発掘報告(1997-2020)』(2022年出版)にまとめられているというが、評者は未見。
- 4) 福建博物院・福建閩越王城博物館編注 2 前掲書『武夷山城村漢城遺址発掘報告(1980-1996)』389頁。
- 5) 福建博物院・福建閩越王城博物館編注 2 前掲書『武夷山城村漢城遺址発掘報告(1980-1996)』398~404頁。
- 6) 閩越の都として伝世文献に記される東冶もしくは冶の所在地については、城村漢城がそれに当たるとする閩北説のほか、福州説、東越王と繇王の併存を前提にそれぞれの王都を閩北と福州に当てる二王二都説などが存在する。さしあたり呉春明「近七十年閩越都城地望探索述評」(『中国史研究動態』1999年第10期) 10~17頁を参照。
- 7) 福建博物院・福建閩越王城博物館編注 2 前掲書『武夷山城村漢城遺址発掘報告(1980-1996)』404頁。
- 8) 『淮南子』人間篇の記述。

- 9) 「越人相攻撃、固其常、又數反覆」、「東越狹多阻、閩越悍、數反覆」。
- 10) 馬王堆漢墓帛書整理小組「長沙馬王堆三號漢墓出土地圖の整理」(『文物』1975年第2期) 37~38頁。
- 11) 広州市文物管理委員会・中国社会科学院考古研究所・広東省博物館編輯『西漢南越王墓』(文物出版社、1991年) 303~310頁。
- 12) 黄展岳「南越木簡選釈」(同氏『南越国考古学研究』中国社会科学出版社、2015年) 235、237頁。
- 13) 大西克也「從里耶秦簡和秦封泥探討“泰”字的造字意義」(武漢大學簡帛研究中心主弁『簡帛』第8輯、上海古籍出版社、2013年) 139~148頁。
- 14) 吉開将人「印からみた南越世界(中篇)——嶺南古璽印考——」(『東洋文化研究所紀要』137、1999年3月) 1~35頁、同氏「印からみた南越世界(後篇)——嶺南古璽印考——」(『東洋文化研究所紀要』139、2000年3月) 1~24頁。
- 15) 楽新珍「嶺南地区漢代文字瓦当の初步研究」(『東方收藏』2021年第13期) 65頁。
- 16) 陳直「福建崇安城村漢城遺址時代の推測」(『考古』1961年第4期) 220頁、林忠幹「崇安漢城遺址年代与性質初探」(『考古』1990年第12期) 1110頁。
- 17) 福建博物院・福建閩越王城博物館編注2前掲書『武夷山城村漢城遺址発掘報告(1980-1996)』385~387頁。
- 18) 岡村秀典「前漢鏡の編年と様式」(『史林』67-5、1984年9月) 5~39頁。
- 19) 吉開将人注14前掲論文「印からみた南越世界(後篇)——嶺南古璽印考——」14~18頁は、南越と長沙国が両国の周辺に存在する百越諸勢力を従える「霸王」としてふるまい、勢力争いを繰り返していた可能性を指摘している。